

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一 3:1~8 「成長させてくださる神」

[1] 「さて、兄弟たちよ。わたしは、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました」

「御霊に属する人」とはその人の存在すべての面において、御霊に導かれ、行動し、生活し、決定していく人のこと。Iコリント2:6の「成人」がこれにあたる。「肉に属する人」とは、その思いが人間の生まれながらに持っている罪に傾き、神よりも自己中心に向かい、罪に共鳴し、罪に働く機会を与える、そのような状態にある人。これは「キリストにある幼子」とも言われている。

[2] 「私はあなたがたに乳を与え、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです」

霊的に幼子の状態にあるコリント人にパウロは神の救いに関するすべてのことを教えるわけにはいかず、もっぱら信仰の基本中の基本であるイエス・キリストの十字架の贖いを宣べ伝えるのみであった。それから数年たってパウロがこの手紙を書いている時点でも「まだ無理なのです」という状態であった。これは痛烈なことばである。

[3] 「あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるではありませんか」

ねたみや争いは肉に属するクリスチャンの特徴である。→ガラテヤ5:19~21 それはクリスチャンでないただの人と同じように生きているに過ぎないことになる。

[4] 「ある人が、『私はパウロにつく』と言えば、別の人は、『私はアポロに』と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか」

人と神との関係は、その人と回りの兄弟姉妹たちとの関係を見ればわかる。→Iヨハネ4:20 肉の思いは教会に分裂分派をもたらす。

[5] 「アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰に入るために用いられたしもべであって、主がおのおのに授けられたとおりのことをしたのです」

アポロもパウロもコリントの人々が信仰に入るために神が用いられたしもべに過ぎない。

[6-8] 「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです」

コリント教会は最初、パウロが伝道し、開拓した。パウロが去って後、雄弁なアポロが来て、さらにみことばを宣べ伝え、教えた。それで、パウロがコリントに神のことばという種をまき、アポロが水を注いだということになる。そして、しもべたちは、それぞれの働きに従って報いを受けることになる。→マタイ 16:27、ローマ 2:6

しかし、一番重要なのは種から芽を出させ、成長させ、実を实らせてくださる神なのである。植える者や水を注ぐ者をめぐって分裂や争いをしているコリント教会は、このことを肝に銘じなければならない。